

和牛を肥育して 32 年・最愛の人にありがとう



漆間 平 (うるま たいら)
漆間 マリ子 (うるま まりこ)
新潟県村上市

推薦理由

1) 事例の概要

漆間さんの経営は、新潟県北部村上市の中山間地で、黒毛和種肥育 85 頭と水稲 280 a、ユリ根 20 a 栽培の複合経営である。

当地域は、県内最大の「にいがた和牛(村上牛)」の生産地帯であり、水稲は銘柄「岩船米」の生産地である。経営主の平さんは、村上牛の中心をなす村上市和牛振興組合長を平成 6 年から 16 年まで務めて、銘柄「村上牛」の確立と独自給与飼料「村上牛配合」づくりと供給に努力を続けてきた。

自らの経営は、昭和 47 年に黒毛和種肥育経営を開始し、昭和 52 年に結婚以降、27 年間、最良のパートナーである奥さんとともに日々創意工夫ときめ細かな飼養管理を積み重ねてきた。早い時期からパソコンを利用した経営管理やインターネットによる情報収集を行い、迅速な経営判断のもと諸技術を高めて、地域で常にハイレベルの技術を有してきた。

最近 2 年間の枝肉格付 4 等級以上格付率は平均で 82% を示し、所得率は 21.1% をと高い経営成果を上げている。水稲部門は良質な「岩船米」を生産するとともに、集落一体となった大豆のブロックローテーションに参加し、30%の米の生産調整にも貢献している。

自身も研鑽を積み重ね経営・生産技術を高めながら、地域の後継者や中堅和牛肥育農家にその技術を伝え、地域や県内の和牛肥育経営基盤づくりに努力している。

地域の農業祭などのイベントへの参加、消費者交流や小学校児童のふれあい体験農場として、生産現場から安全な牛肉生産を PR しているとともに、村上牛を提供

している市内のレストラン、食肉店、温泉旅館、JAで組織している「村上牛友の会」に生産面から支援して、地域の産業に結びついた地産地消を推進している。

また、自身を含めた7戸で組織した稲作生産集団「こがね会」の刈り取り後の稲わら収集と圃場へのたい肥散布を行って、安全な稲わらの確保と循環型農業を実践している（他の6戸は肉用牛を飼養していない）。

2) 当該事例の評価された点

結婚以来、常に夫婦が最良のパートナーとしてお互いを信頼し、助け合って経営に臨み、高い成果を上げている。

県内の主要な銘柄牛「村上牛」の立ち上げと確立に尽力してきた。

枝肉の品質向上と合理化を図るため、マニュアル化した給与飼料「村上牛配合」作りと供給の実現に努力してきた。

自ら研鑽し諸技術を高めながら、高品質の枝肉生産を続けて高い経営成果を得ていること、その技術が今後も期待出来ること、また、県の「にいがた和牛肥育名人認定事業」の「肥育名人」の認定を受け、地域の後継者や中堅肥育農家に技術を伝えながら和牛肥育経営基盤の安定と強化に努めている。

「稲わらを粗飼料に、牛ふん尿たい肥を地力増進に」を目的に自身を含めた7戸で稲作生産集団「こがね会」を組織して、岩船米の品質向上と安全な稲わら給与といった循環型農業を実践している。

消費者の交流や地元小学校児童の家畜とのふれあい農場として、消費者や児童を受け入れ、生産現場から安全な牛肉生産をPRするとともに、村上市農業祭り等のイベント参加や「村上牛友の会」を支援して、村上牛の消費拡大活動を通じた地産地消に努力している。

以上の点を評価し推薦する。

（新潟県審査委員会委員長 楠原 征治）

発表事例の内容

1 地域の概況

(1) 一般概況

村上市は新潟県の北部岩船郡のほぼ中央にあり、西は日本海、東は越後山脈を背にして山形県に接する中山間地である。

総面積 142.12km² 人口 30,738 人

(2) 気候

年平均気温 13.3 年間降水量 2,605mm

(3) 農業・畜産の状況

農業はコシヒカリを主体とする稲を基幹作物とし、このほかにネギや日本海側北限の茶の栽培が盛んである。肉用牛は、「にいがた和牛（村上牛）」の産地として有名である。

農家戸数・農家人口 843 戸・2810 人

経営耕地面積 1120ha（うち水田 904ha、畑 217ha）

農業産出額 22 億 7600 万円

うち米 11 億 6600 万円

畜産 7 億 7900 万円

そ菜 2 億 300 万円

花き 5700 円

畜産農家戸数（黒毛和種肥育 12 戸、養豚 2 戸、採卵鶏 1 戸）

飼養頭羽数：肉牛 337 頭、豚 2388 頭、採卵鶏 63.3 万羽

農業産出額 22 億 7600 万円

2 経営実績（経営収支・損益等）を裏付ける取り組み内容等

(1) 経営の確立と管理技術の向上

内助の功と工夫を重ねた飼養管理

漆間さんの経営は、黒毛和種肥育牛 85 頭、水稻 285 a、畑作（ユリ根）20 a の複合経営で、中山間地である当地域の個人経営の中では比較的大規模な経営である。

当地域の肉用牛肥育経営は 15 戸あるが、そのほとんどが経営主 1 人によるもので、ともすると日常管理に見落としがみられ、成果に結びついていない経営もある。経営主の平さんは、マリ子さんを「単なる労働提供者ではなく、最も信頼の出

来る良きパートナー」として、夫婦二人三脚で営んでいる。マリ子さんも村上牛会長職等で多忙な本人に代わり日々の飼養管理を行ってきており、牛舎内の細部までの目配りは経営主以上のものがある。

確実な経営管理

平成元年からパソコンを導入して経営管理を行い、青色申告につなげて無駄をなくすよう努めている。また、電柱を使用した自家労力による低コスト牛舎建設や2分の1補助金付リース事業の活用によるたい肥舎建設、機械の保守管理をきちんと行い、トラクターやヘイベラーを購入後20年以上も使用するなど徹底的な投資を抑制し、無理のない経営を行っている。

インターネットを利用した情報収集も行っており、モト牛買い付けや先進技術の導入等、情報を経営判断のために活用している。

(2) 村上牛枝肉の高品質化と付加価値化の実現

品質向上は販売収入を上げ、経営の向上につながることから、次のことに努力してきた。その1つは、飼養牛の持っている能力を発揮させるための牛舎内環境の整備である。舎内環境の悪化は、増体量の低迷や枝肉の品質低下になる。そのため飼養管理を工夫し、事故発生の要因となるストレス防止のため、牛舎の開放や換気扇の設置、牛床面積を1頭当たり6.6㎡と広く取り、仕上げ期は飼養群を2頭と少なくし、さらに飼料を1頭ごとに設置した飼槽を使って給与するなど、諸施設・環境を整備している。

もう1つは、給与飼料の改善である。漆間さんは、以前は自家配合を主体とする飼料給与を行ってきたが、規模拡大にともなって合理的で安定した飼料が必要となった。このことから、同じ考えをもつ村上牛生産者をリードし、JAグループの協力を得ながら飼料設計と給与マニュアルを作成した。具体的には、平成11年から検討を重ねながら給与試験を行い、平成14年に非遺伝子組換え穀物を利用した「村上牛配合」を完成させ、信越くみあい飼料(株)に配合を依頼し、村上牛生産者共通の飼料給与を開始した。以後も成果をみながら内容の充実をさせてきている。

なお、取り組みの成果として、枝肉重量の増加と格付率の向上が図られた。

表 去勢牛の技術成績(平成15、16年)

区 分	枝肉重量		格付4等級以上率	
	15年	16年	15年	16年
当該経営	450 kg	460 kg	80.6 %	81.8 %
村上牛生産者平均	445 kg	450 kg	66.4 %	68.3 %

(3) 地域銘柄「村上牛」の立ち上げと確立に尽力

昭和 62 年に市内の和牛肥育仲間が結束して、和牛肥育集団「村上市和牛振興組合」を設立して、東京食肉市場への出荷を開始した。当初は品質不足と無銘柄のために販売価格が上がらず経営成果に結び付かなかった。

これに対処するため、同組合が中心となって働きかけを行い、系統主導で平成元年に村上牛生産協議会を設立、地域銘柄「村上牛」を立ち上げた。平成 8 年には黒川村が加わり一層の量増加と質が高められている。

漆間さんは、昭和 62 年～平成 5 年の間は前会長を支え、平成 6 年～16 年の間は自らが会長として枝肉品質の向上に尽力した。また、平成 15 年には県内統一ブランド「にいがた和牛」の立ち上げに尽力した。

なお、村上牛の生産者数は 58 戸、飼養頭数は県内の約 40% を占める 1,471 頭、生産者 1 戸当たりの平均飼養頭数は 25.4 頭である（平成 16 年 2 月 1 日現在）。

(4) 稲作生産集団設立と稲わら収集、たい肥の土地還元

村上市と岩船郡内は、地域銘柄「岩船米」の産地である。品質の良い「岩船米」を生産するために有機質肥料を施用する必要があるため、平成 14 年に 7 戸で水稻生産組織「こがね会」を設立した。漆間さんは、7 戸の水田 13ha の刈り取り後の稲わらを収集し安全で低コストな稲わらを確保するとともに、たい肥を散布して地力増進に貢献している。

3 経営・生産の内容

1) 労働力の構成

(平成 16 年 12 月現在)

区分	続柄	年齢	農業従事日数(日)		年間 総労働時間 (時間)	労賃 単価 (円)	備考 【作業分担等】
				うち 畜産部門			
家族	本人	53	350	330	1,437	1,400	全般
	妻	53	330	330	1,095	1,400	飼養管理
	長男	26	50	30	180	1,400	農外(飼養管理)
	二男	19	0	0			農外
	父	85	0	0			
	母	77	200	0			
常雇	なし						
臨時雇	のべ 4 人日				20	1,000	
合計			934	694	2,732		

2) 収入等の状況

(平成16年1月～平成16年12月)

区 分		種 類 品目名	作付面積 飼養頭数	販売量	販売額・ 収入額	収 入 構成比
農業生産部門収入	畜産	黒毛和種肥育牛	76.9頭	41頭	40,937,374円	91.7%
					円	
					円	
	耕種	水稻		11,740kg	3,084,519円	6.9%
		ユリ根		15,880球	642,427円	1.4%
加工・販売部門収入						
農外収入						
合 計					44,664,320円	100.0%

3) 土地所有と利用状況

単位：a

区 分			実 面 積			備 考
			うち借地	うち畜産利用地面積		
個別 利用 地	耕 地	田	300	105	0	
		畑	20	0	0	
		樹園地				
		計	320	105	0	
	耕地 以外	牧草地	100	60	100	
		野草地				
		計	100	60	100	
	畜舎・運動場		60		60	
	そ の 他	山林	50		50	
		原野				
		計	50		50	
	共同利用地					

4) 施設等の所有・利用状況

種類		棟数・面積 ・台数	取得		所有 区分	構造・資材 ・形式能力	備考
			年	金額(円)			
畜 舎	牛舎	1	S56	1,373,910		木造	
	牛舎	1	S61	3,400,000		木造	
	牛舎	1	H10	2,737,531		木造	
	牛舎	1	H10	2,427,107		木造	
施 設	堆肥舎	1	H14	4,297,062		木造	
機 械	牛舎送風機	1	H4	186,945			
	牛舎給湯器	1	H4	412,000			
	軽貨物	1	H14	1,085,777			
	普通貨物	1	H7	5,000,000			
	普通貨物	1	H8	5,900,000			
	フォークリフト	1	H10	1,522,500			
	フォークリフト	1	H12	435,750			
	ショベルカー	1	H4	3,209,480			
	ショベルカー	1	H15	1,829,300			

5) 自給飼料の生産と利用状況

(平成16年1月～平成16年12月)

使用 区分	飼料の 作付体系	地目	面積(a)		所有 区分	総収量 (t)	10a当たり 年間収量 (t)	主 な 利用形態 (採草の場合)
			実面積	のべ 面積				
採草	イネアライグサ	畑	40	80	自己	14.4	3.6	1 番草：乾草 2 番草：乾草
採草	イネアライグサ	畑	60	120	借地	21.6	3.6	1 番草：乾草 2 番草：乾草
計			100	200		36.0		

6) 経営の実績・技術等の概要

(1) 経営実績（平成 16 年 1 月～平成 16 年 12 月）

経営の概要	労働力員数 （畜産部門・2200時間換算）		家族	1.2 人	
			雇用	0.0 人	
	飼料生産		実面積	100 a	
			延べ面積	200 a	
	イナワラ回収			700 a	
	肥育牛 平均 飼養頭数	肉用種		76.9 頭	
		交雑種		頭	
		乳用種		頭	
	年間 肥育牛 販売頭数	肉用種		41 頭	
交雑種		頭			
乳用種		頭			
収益性	年間総所得			8,207,589 円	
	肥育牛 1 頭当たり年間所得			106,731 円	
	所得率			20.5 %	
	肥育牛 1 頭当たり	部門収入		519,727 円	
		うち肥育牛販売収入		517,387 円	
		売上原価		401,974 円	
		うちもと畜費		221,675 円	
		うち購入飼料費		161,232 円	
		うち労働費		46,720 円	
うち減価償却費		13,375 円			
生産性	肥育（品種・肥育タイプ）	肉用種（黒毛和種去勢若齢）	肥育開始時	日齢	270 日
				体重	268 kg
		肥育牛 1 頭当たり	出荷時月齢		29.7 カ月
			出荷時生体重		726 kg
		平均肥育日数			633 日
		販売肥育牛 1 頭 1 日当たり増体量（DG）			0.72 kg
		対常時頭数事故率			0 %
		販売肉牛 1 頭当たり販売価格			1,015,211 円
		販売肉牛生体 1 kg 当たり販売価格			1,398 円
		枝肉 1 kg 当たり販売価格			2,207 円
		肉質等級 4 以上格付率			81.8 %
		もと牛 1 頭当たり導入価格			426,535 円
もと牛生体 1 kg 当たり導入価格			1,592 円		

生産性	肥育（品種・肥育タイプ）	肉用種（黒毛和種雌若齢）	肥育開始時	日齢	299 日
				体重	254 kg
			肥育牛 1 頭当たり	出荷時月齢	29.4 カ月
				出荷時生体重	617 kg
			平均肥育日数		594 日
			販売肥育牛 1 頭 1 日当たり増体量（DG）		0.61 kg
			対常時頭数事故率		0 %
			販売肉牛 1 頭当たり販売価格		918,545 円
			販売肉牛生体 1 kg 当たり販売価格		1,489 円
			枝肉 1 kg 当たり販売価格		2,328 円
			肉質等級 4 以上格付率		78.9 %
			もと牛 1 頭当たり導入価格		349,618 円
			もと牛生体 1 kg 当たり導入価格		1,376 円
	肥育牛 1 頭当たり投下労働時間		35.5 時間		
安全性		総借入金残高（期末時）		3,073 万円	
		肥育牛 1 頭当たり借入金残高（期末時）		399,597 円	
		肥育牛 1 頭当たり年間借入金償還負担額		49,000 円	

(2) 技術等の概要

経営類型（飼養品種）	肉用牛肥育（黒毛和種）
自家配合の実施	なし
TMRの実施方法	なし
食品副産物の利用	なし
サイレージ給与	なし
除角の実施	なし
肥育の目標	肉質・増体ともに重視
ブランド牛生産	実施
預託肥育牛の実施	あり（系統預託）
ヘルパーの利用	なし
コントラクターの活用	なし
協業・共同作業の実施	なし
施設・機器具等の共同利用	建物・施設
生産部門以外の取り組み	食農・体験交流活動（家畜とのふれあい体験等）
後継者の確保状況	就農予定だが、現在は他産業に就職

4 経営の歩み

1) 経営・活動の推移

年次	作目構成	頭数	経営および活動の推移
昭和 45	水稲 180a		県立高等学校農業科を卒業し就農する。
昭和 47	肥育牛 + 水稲 180 a + 葉タバコ 60 a	肥育牛 20	後継者育成資金を借りて肥育舎を建設して、黒毛和種肥育経営を開始する。
昭和 51	〃	肥育牛 50	肥育舎を増設し規模拡大を行う。
昭和 52	〃	肥育牛 50	結婚する。
昭和 59	〃	肥育牛 50	古電柱と自家労力を使って、低コスト肥育舎を増築して収容面積を多くし、1房当たりの頭数を少なくして肥育環境の改善を図る。
昭和 62	〃	肥育牛 50	村上市農協肉牛青年部会長に就任、村上市和牛振興組合に参画し村上牛の産地化、銘柄化に務める。地域銘柄「村上牛」を確立する。
平成元	〃	肥育牛 50	地域青色申告会副会長に就任し推進を図る。
平成 2	肥育牛 + 水稲 300 a	肥育牛 50	肥育牛舎を増築し規模の拡大を図る。
平成 3	〃	肥育牛 85	村上市和牛振興組合長就任。以後 10 年間努める。
平成 6	(葉タバコ中止) 肥育牛 + 水稲 300 a + ユリ根 60 a	肥育牛 85	この間村上牛の生産振興と品質向上に努力する。
平成 10	〃	肥育牛 85	水田の圃場整備がなされる。
平成 11	〃	肥育牛 85	肉用牛生産基盤安定化支援対策事業で、村上牛統一給与配合飼料の造成のための給与試験を開始し 14 年まで生産集団代表として、クループ員をまとめながら継続実施する。
平成 13	〃	肥育牛 85	村上市家畜排せつ物対策協議会会長に就任する。地域 5 J A が合併し J A にいがた岩船が誕生する。
平成 14	〃	肥育牛 85	村上牛統一給与配合飼料「村上牛配合」が供給開始。以後 16 年 3 月まで、さらに給与試験を行う。圃場整備を契機に 7 戸で水稲生産組織「こがね会」を設立、副会長に就任し収穫の共同化を図る。畜産環境整備リース事業で堆肥舎を建設する。
平成 15	肥育牛 + 水稲 300 a + 採草地 100 a + ユリ根 20 a	肥育牛 85 繁殖牛 2	繁殖牛（経産牛）を導入して、子取り技術を試みている。ユリ根畑を減らし牧草を作る。新潟県の新規農業者支援事業で研修生受入実施する
平成 16	〃	肥育牛 85	村上市和牛振興組合長として、村上牛を新潟県統一ブランド「にいがた和牛」への統一化に尽力する。新潟県指導農業者に認定される。合併で統一された J A 肉牛部会の役員に就任する。にいがた和牛推進協議会事業のにいがた和牛肥育名人に認定される。

2) 現在までの先駆的・特徴的な取り組み

経営・活動の推移のなかで先駆的な取り組みや他の経営にも参考になる特徴的な取り組み等	取り組んだ動機、背景や取り組みの実施・実現にあたって工夫した点、外部から受けた支援等
<p>1. 専業農業への道</p> <p>複合専業農業を目指して黒毛和種肥育経営を開始した昭和 47 年当時は、水稲 180 a、葉タバコ 60 a、肥育牛 20 頭であった。昭和 52 年の結婚以降は、内助の功もあって、現在のような専業農業への道を進むことが出来るようになった。</p> <p>2. 黒毛和種肥育経営の前進</p> <p>(1) 生産コストの低減</p> <p>和牛肥育経営は、サイクルが長く、多くの資金を要し、資金の流動も遅い。生産コストの高低は経営に大きく影響することから、次の点を対応してきた。</p> <p>ア 飼養牛事故防止の工夫</p> <p>飼養牛には、持っている能力を十分に発揮させてこそ肉量を多くし、品質を高めることが経営を安定させることを認識した。それには飼養環境整備が最も大切であると実感し、夏場、冬場の気候変動を和らげるために敷料の交換度合いや換気対策を行った。このほかに群飼の牛房内で飼養牛の競合を避け事故を防止するため 1 頭当たりの牛床面積を 6.6m²と広くした。とくに仕上げ期は 1 群 2 頭と群を小さくした。</p> <p>イ 施設投資の削減</p> <p>牛舎やたい堆肥舎の建設費は、安い資材使用や補助金の活用で投資を極力抑制削減した。</p> <p>また、機械は、保守管理を徹底し、長期に使用しており、施設機械投資の低減につながっている。</p>	<p>結婚当時の水稲 180 a、葉タバコ 60 a、肥育牛 50 頭は、夫婦が力を合わせてやらなければ出来ない農業規模であり、この頃から「妻は労働者にあらず最良のパートナー」をモットーに、お互いが自分がないものを補いながら今日の基盤を築いてきた。</p> <p>1 頭当たり牛床を 6.6m²と広くしたこと、仕上げ期は飼槽を 100cm 間隔で 1 頭ごとに設置した。</p> <p>飼槽は、半切のドラム缶を止め金具で固定して丸太の置き台に設置している。また、飲料水は、ウォーターカップで飼槽と飼槽の間に設置してカップの給水パイプを孟宗竹にて覆い、牛の事故と破損の防止につながっている。</p> <p>牛床面積等、県内で規模拡大を目指す農家の教科書的存在となっている。</p> <p>肥育舎は、古電柱を使用し自家労力にて、また、たい肥舎は 2 分の 1 補助付リースを利用して低コストで建設した。</p> <p>機械は、保守管理を徹底し償却後のものも多く使用しており、中には 23 年も使用しているトラクターや飼料作機械もある。</p>

(2) 適切な経営管理と情報収集

パソコンで経営管理し青色申告書を作成している。また、インターネットで情報収集して、先進技術の導入や経営の合理化を図っている。

3. 枝肉の有利販売と品質向上の推進

(1) 地域銘柄「村上牛」の確立

黒毛和種肥育は、高級牛肉を作りいかに有利に販売できるかが経営戦略であって、これを可能に出来るように 62 年に設立した肥育生産集団村上市和牛振興組合が中心的役割を果たして、地域 6 農協、市町村、県経済連で組織する村上牛生産協議会で、平成元年に地域銘柄村上牛を確立させた。

< 当該経営の各種枝肉共励会の成績 >

H2 村上牛枝肉共奨励会最優秀賞受賞

H8 全国肉用牛枝肉共励会(雌牛の部)
優秀賞受賞

H15 村上牛枝肉共励会最優秀賞受賞

(2) 村上牛統一給与配合飼料づくり

村上牛の枝肉品質向上のために地域生産者はそれぞれが試行錯誤を重ねてきた。そのなかで、常に高成績を上げて来た漆間さんが中心となって、枝肉の品質向上と斉一化を図るための配合飼料づくりを提唱し、平成 11 年から給与試験を開始、最終的に平成 14 年に「村上牛配合」として作り上げた。

経営主は、この給与試験と検討会議をリードして、実現に努力してきた。

平成元年パソコンを導入し、ソフト開発会社の研修会で操作を学び経営管理を行い青色申告書の作成も行っている。

また、インターネットで情報収集し迅速な経営判断に役立てている。

経営開始当初は、飼養技術も未熟であり、取引も生体取引が多く、思うような経営成果を上げられなかった。昭和 62 年に東京食肉市場に出荷して打開をねらったが、買参人からは、質・量の確保と地域銘柄化を強く求められた。これを受けて平成元年に「村上牛」を立ち上げた。

経営主は村上市和牛振興組合の会長を平成 6 年から就任して、ブランド強化に努力し、平成 15 年には県内の統一ブランド「にいがた和牛」の実現に尽力してきた。

村上牛生産者の間には、枝肉の質・量とも経営成果に大きな格差が見られ、生産者から合理的で統一マニュアルに添って給与出来る配合飼料作りの要望があり、平成 11 年に農協系統の協力を得ながら肉用牛生産基盤安定化支援対策事業で給与飼料を設計・検討し、給与試験と検討を重ね、平成 14 年信越くみあい飼料(株)が村上牛配合飼料の供給を開始した。

4. 耕畜連携による循環型農業を推進

平成 10 年の水田の圃場整備後、地力増強のためにたい肥の需要が高まったのを受け、平成 14 年に水稻および畑作農家とともに 7 戸で稲作生産組織「こがね会」を設立し、秋の刈り取りの共同作業を行っている。

5. 地域活動

(1) 消費者交流活動

農場は地域小学校児童の見学の場であり、消費者交流の場として開放し、それぞれの者を受け入れて肥育牛の生産現場を理解してもらう努力をしている。

さらには、関係機関・団体が行う研修事業に協力し、県内の肥育牛経営後継者の育成や中堅肥育農家の諸技術向上に貢献してきている。

(2) 家畜排せつ物の適正化処理の推進

平成 13 年～16 年に村上市が関係者 20 名で設置した村上市家畜排せつ物対策協議会に村上市和牛振興組合を代表して参加し、協議会会長に就任して、管内の畜産農家のふん尿処理実態の巡回指導、家畜ふん尿処理のあり方や堆肥需給体制の整備を検討するとともにこれらをリードして来た。

漆間さんは、刈り取り後の圃場の稲わらをヘイベラーで収集し、また、収集した圃場にマニュアルスプレッターで 10 a 当たりおおよそ 800kg のたい肥を散布している。安全性の高い稲わらを自給し、タイ肥を土地に還元することで「循環型農業」を実践している。

地元小学生が情操教育として当該農場を訪問し家畜とのふれあい体験や訪問体験を行った内容を HP に掲載した。それをみた県内テレビ局が取材に訪れ、肥育牛の生産現場を放映したこともある。

また、消費者との交流を通して、生産現場から牛肉の安全性を PR して理解を得る努力をしている。

さらには、平成 14～15 年度に新潟県新規農業者支援事業の受入農家として、また、平成 16 年度に「にいがた和牛肥育名人認定事業」の「肥育名人」の認定を受けたこともあり、県内和牛肥育経営の後継者ならびに中堅経営者を研修生として受け入れ、県内肥育農家の経営生産技術の高位平準化に貢献している。

5 家畜排せつ物の処理・利用方法と環境保全対策

1) 排せつ物の処理・利用において特徴的な点

(1) 処理方法

方式	混合処理
処理方法	牛舎内でふん尿を敷料吸着させ、ボロ出し（水分約 60%） たい肥舎に搬入後 1 週間経過後、切り返しを実施。以後 1 週間ごとに 2 回の切り返しを実施。
敷料	オガクズ
期間	季節に応じて 3 ~ 6 ヶ月

(2) 利用方法（たい肥）

内容	割合	用途・利用先等	条件等	備考
販売	50%		3,000 円/2 tトラックで配達	
交換	25%	稲ワラ交換 （稲作生産集団の水田）	マニユアスプレッターで 800kg/10 a を散布	稲ワラ回収およびたい肥散布は漆間さんが実施
無償譲渡	10%	近隣耕種農家	耕種農家が引き取り	
自家利用	15%			

2) 排せつ物の処理・利用における課題

現状としては、たい肥舎のスペースは十分あり、敷料不足も生じておらず、とくに問題はない。ただし、地理的条件の影響から以下のような課題が発生することもある。

積雪のために冬期間にたい肥の運搬等が不可能で堆積量が増える。

水稲生産集団「こがね会」に散布しているが、秋の長雨で全面散布が難しい年もある。

長い冬期を終えた春先の農作業開始時期に一気に需要が発生し、たい肥が不足することもある。

3) 周辺の環境美化に関する取り組み

住居圏内から離れているため苦情発生は無いし、河川の汚染も皆無である。

また、牛舎周辺の整頓と害虫の発生防止には気を配っている。適宜牛舎周辺の除草と殺虫剤散布等を行っているほか、管内の農業共済組合でも毎月 1 回牛舎消毒を実施している。

6 地域農業や地域社会との協調・融和についての活動内容

(1) 地域の農業・畜産の仲間との共存のための青年農業活動

合併前の村上市和牛振興組合会長、合併後のにいがた岩船農業協同組合肉牛部会長及び村上牛生産協議会のメンバーとして、生産者集団をまとめて、村上牛の確立と村上牛配合飼料給与マニュアルづくりに努力してきた。併せて、生産者相互の融和に努めている。

(2) 地域循環型農業の確立（耕種農家との結びつき）

耕種農家6戸とともに稲作生産集団「こがね会」を組織して保有する13haの水稲収穫期の共同作業を実施している。また、稲の収穫後の圃場には漆間さんが稲わら収集とたい肥散布を行い、地域循環型農業を実践している。

また、自身もユリ根の栽培地の堆肥施用と牧草100aの堆肥散布を行っている。

(3) 遊休地の利用（転作田の有効活用）

転作は、集落単位で水田の30%ほどをブロックローテーション方式で大豆の栽培を行っている。また、15年には、前年までユリ根栽培を行っていた60aの畑のうち40aと借地60aを利用して、繁殖牛2頭の給与用牧草を栽培している。

(4) 地域のリーダーとしての担い手育成

（指導農業士としての活動、新規就農希望者の研修受入れ等）

日頃から、村上牛の先進農家としてグループ員や視察者に優れた生産技術を伝えて、担い手の生産技術向上に努めている。平成15年に指導農業士に認定されて、同年新潟県が行う新規農業者支援事業で地域の肥育農家の後継者を研修生に受け入れて生産管理指導を行っている。16年には、「にいがた和牛肥育名人認定事業」の「肥育名人」の認定を受け、後身の肥育経営者への技術研修指導にあたっている。

(5) 地産地消への取り組み（産直所での加工・販売や地域イベントへの参加等）

J A、J A肉牛部会、市内レストランや割烹、食肉店、観光地の温泉旅館で組織する「村上牛友の会」は、村上牛をメニュー化し訪れるお客に提供して、地元産牛肉消費活動の推進を図っている。

また、村上市とJ Aが主催する農水産祭りに村上牛コーナーを設け、メンバーとともに村上牛PRチラシの配布、牛肉串焼やパック詰め牛肉の販売を実施している。

(6) 畜産への理解を深める活動（地域の子供達の見学受け入れ、消費者交流等）

地域の小学校児童を毎年受け入れて子どもたちの情操教育を行っている。また、地域消費者グループやにいがた和牛推進協議会の消費者との交流農場として、消費者を受け入れ、現場から牛肉の安全生産の理解を得る努力を行っている。

7 今後の目指す方向性と課題

< 経営者自身の考える事項 >

経営形態としては、水稲と黒毛和種肥育の複合経営を充実させていく。

水稲は、集落営農の形を指向して、県内銘柄魚沼米に並ぶ「岩船米」の品質向上と生産販売の促進に努めていきたいと考えている。なお、これにあたっては、土地流動の鈍化と構成員の高齢化が進んでいることが課題である。

一方、黒毛和種肥育は、近い将来 150 頭程度の規模拡大を図って、現在他産業に就業している後継者が就農できるように経営基盤の強化を検討している。増頭にあたっては、経営規模拡大に必要な施設費と回転までのモト畜費、飼料費等多額の運転資金の確保が課題である。

また、個人経営のままでは、労働者の確保・資金の確保等に限界があることから法人化を行いたいと考えている。

新潟県審査委員会の評価

水稲部門は、これからの農業の方向に沿った集落営農への取り組みが取り上げられている。一方、黒毛和種肥育部門では、後継者の就農に向けた経営基盤の強化のため、当面現在の 2 倍程度の規模拡大と法人経営への指向が示されている。

「現在組織されている稲作生産集団は漆間さんのリーダーシップを発揮することでさらに強化が期待される」こと、「現在は他産業に就いている長男が農業継承に意欲的である」ことなどから、本経営は今後とも前進していくと確信出来る。

写真



農場遠景



村上牛の解説板は生産農場の証



肥育舎の飼槽は1頭ごとに設置



育成舎の飼槽



古材チップと糞かすの敷料



古材を利用した牛舎



バガス混合発酵飼料



たい肥舎